

# 音楽の世界

Monthly journal "The World of Music"

1963年10月14日第三種郵便認可  
第51巻8号 通巻542号  
2012年10月1日発行  
(毎月1回1日発行)

ISSN 1342-5463

音楽家が自ら作るマンスリージャーナル

## 特集

△最近の音楽界の現象・出来事△  
中嶋恒雄・西耕一・小西徹郎・橋川琢

2012年  
10月号

論壇 モノ文化と音楽、芸術 小西徹郎

連載

音・雑記—ひなの里通信—

名曲喫茶の片隅から

音盤奇譚

私とラジオ・ドラマ

福島日記(13)

◆CMDJ2012 オペラコンサート『愛の表と裏』報告

制作現場からの報告 実行委員長

音楽会評 「愛の表と裏」 助川敏弥

書評：松村禎三「作曲家の言葉」／アフリカに暮らして

読物： 作曲家と即興演奏

訃報 伝説のヴァイオリニスト諏訪根自子逝去

コンサートリポート『オーケストラ・トリビュート 管弦による奏楽堂の響き』

◆コンサート・プログラム◆～様々な音の風景～IX



CMDJ オペラコンサート『愛の表と裏』 フィナーレ

## チェコの小さな音楽事情

## —クロメリジーシュの現代音楽祭を中心に—

作曲 中嶋恒雄

## 1. まえがき

本年6月にソプラノの家内とともにチェコのプラハ、ドマジュリツエ、フラデツ・クラーロヴェ、クロメリジーシュの4ヶ所を巡って演奏旅行をした。プログラムは私の歌曲作品を中心にして、幾つかの日本歌曲とともに、同行したピアニストの独奏曲もジョイントにし、所に応じて入れ替えながら演奏した。これはチェコの音楽事情のささやかな報告である。

ご存知のようにヨーロッパの中央にあるチェコは、わが国からは直行の飛行便も無い小さな国である。したがって一部の旅行マニアや識者、商社、生産会社関係者など以外は、ほとんどの日本人が漠然とした知識を持つのみであろう。音楽関係者であれば、それはスマタナ、ドヴォルザークの名前と音楽である。私自身も今回3度目のチェコ訪問をするまで、ドマジュリツエ、フラデツ・クラーロヴェ、クロメリジーシュというような街は、名前さえ聞いた事も無く、まったく知識も持たずにチェコのピアニスト、グロスネロヴァー・ユリア大橋の言うままについて行っただけであった。し

## 音楽現代

2012年10月号 定価 840円

♪特集=「エリーザベト・フルトヴェングラー101歳の少女／フルトヴェングラー夫妻、愛の往復書簡」刊行記念、今、改めてフルトヴェングラーの人間と音楽を考える。

特別対談 宇野功芳×野口剛夫

♪特別企画=アニヴァーサリーな音楽家たち Vol.7~9  
スピヤトラフ・リヒテル、ナタン・ミルシtein、キルステン・フラグスタート

♪カラーオ絵

・パシフィック・ミュージック・フェスティバル (PMF)  
2012

・読売日本交響楽団創立50周年特別公演  
「世界平和への祈り～広島・長崎特別演奏会」

♪インタビュー

戸田弥生、エレーナ・アシュケナージ、瀧井敬子 他

〒111-0054 東京都台東区鳥越2-11-11

TOMYビル3F

芸術現代社 Tel3861-2159

かしクロメリジーシュの現代音楽祭に参加し、現地の音楽家や、音楽に触れ、彼らの音楽に対する真摯さ、私の音楽への理解度の高さを知ることによって、彼らのことをもっと良く知り、お互いに交流することは私たちの音楽のあり方のためにも重要な気がついて、この報告をする次第である。今日、わが国は、韓国や中国との領土問題で急に騒がしくなった。しかしチェコの事情を多少でも知つてみると、日

本人はまだまだ、あまりにも呑気過ぎると思わざるを得ない。チェコの知識人の生きて行くモットーは、「黄金より自由を」というものである。ここには彼らの歴史への無限の想いが込められている。私の無調と有調を行き来する様式の音楽は、音楽の非常に自由なあり方を示すものとして、彼らの耳に評価されたようだ。家内が私の作品の演奏を終えて万雷の拍手の中を控え室に戻ってくると、作曲家や演奏家の大男たちが次々と、まるで王妃さまに敬意を表するかのように、家内の手を取って腰を屈め、キスをしたのには驚かされた。また楽屋の女性たちも次々に家内の身体を肩から抱きしめ、お目出度うを慣れない英語や良く分からぬチェコ語で言ってくれた。このようなことは、私たち日本の中で演奏しているだけでは絶対に起りえないし、慣習的に理解し難いことであるので、チェコ人が音楽をどのようなものとして考えているのか、その背景を探ってみよう。

## 2. チェコ共和国小史



私が1ヶ月滞在したプラハ郊外の家具付きペンションの外観。この建物は14世紀に建てられ、領主の館であった。日本のホテルよりずっと安い値段で借りられる。

チェコは、人口が1000万ちょっと、国土も日本の5分の1ほどの小さな国である。第1次大戦以後チェコとスロヴァキアは統一国家であったが、1993年に分離独立した。地図を見ればすぐに分かるが、すぐ西側にドイツ、南にオーストリア、北東部のポーランド、そしてさらに東にロシアと地続きに国境を接している。ということは、日本の竹島、尖閣諸島、北方領土以上に、紛争と支配と略奪の苦難の歴史を抱えた国だということである。

しかしチェコの首都プラハには、京都と同じように第2次世界大戦の戦火を潜って

古い建物がそのままに残されている。これがドイツからも、ロシア（ソ連）からも爆撃にさらされなかつた事情は、アメリカの爆撃を受けずに済んだ京都以上に複雑である。プラハを観光する多くの人が訪れる第一の場所は、プラハの街を東西に分断して流れるヴルタヴァ川に架けられたカレル橋である。この橋に名前を残したカレルとは、14世紀プラハの発展に尽くした、神聖ローマ皇帝カレル4世である。彼の母がチェコの国を創設した家系であるために、父方はドイツの名門貴族であるにもかかわらず、彼は神聖ローマ皇帝となってからも、チェコ人としての意識を持ち続けたと云われ、チェコ人から「祖国の父」と崇められている。

ドイツとチェコの関係は、今日にも尾を引く厄介な問題を抱えている。カレル4世の先祖シェミスル家の君主たちは、ハンガリーのマジャール人のチェコ（ボヘミア）を領有するなど、複雑な歴史的関係がある。

ミア)への侵入を防ぐために、ドイツ王であり神聖ローマ皇帝でもある皇帝の封臣となって、チェコは神聖ローマ帝国の1領域になった。

しかしこの事実が、カレルの後に神聖ローマ皇帝の地位を独占したハプスブルク家や、ヒットラーの支配を許す遠因となっている。特にハプスブルクの支配は、17世紀のビーラー・ホラの戦いの結果としてより強められ、チェコのドイツ化が進み、チェコ語やチェコ文化の衰退が始まったのであるが、1784年、ヨーゼフ2世の公用語をドイツ語にするという言語令によって、チェコの文化、言語の衰退は極まったということができる。また、すでに13世紀には収入増を図って、有利な条件でドイツから多数の植民者をチェコに呼び寄せたこと、ビーラー・ホラの戦いの原因の1つであった多数のドイツ人官吏の登用は、チェコ国内にドイツ人が多数住む地域が形成されたことによって、今日のドイツとチェコの緊張関係の大きな原因となっている。

第2次大戦の後チェコは共産圏の国になった。これにも大きな事情がある。1938年の英仏独伊の4ヶ国首脳会議ではチェコを参加させないままに、ドイツ人の多く住む地域のヒットラードイツへの割譲を決定したこと、またこの決定に異議を唱えたのがソ連だけであり、さらにソ連は、ドイツの占領下にあったチェコを解放したことによって、当然のようにチェコ国民の期待はソ連に向かった。そこで反ナチの為に戦った国民戦線政府、次いで共産党の政治体制が生まれたのである。この戦後最初の国民戦線政府は、250万とも300万とも云われるチェコ内に住むドイツ人をすべて、チェコから追放した。しかし1992年、チェコとドイツはナチスのチェコ支配によるドイツの責任、この結果によるドイツ人追放という集団的罪のチェコの責任を双方が認め合い和解して、チェコはEUに加盟した。しかしこれらドイツ人たちへの個人補償問題が未解決のために、現在でも、ユーロ通貨を公式通貨として使用出来ない原因になっている。さて、さかのぼって米ソの冷戦が始まる1947年に、ソ連は東欧諸国のソ連圏組み入れを意図し始め、チェコの「人間の顔をした社会主义」という独立路線は、ソ連軍のチェコ侵入によって、党首脳部が拉致され、あっけなく挫折させられた。それでも1991年にソビエト連邦の共産体制が解体すると、チェコとスロヴァキアの分離という代償を払いながらも、ようやく今日の民主的な体制になったのである。



ベンションの窓越しに見られるのどかな風景。

### 3. クロメリージュ現代音楽祭2012

臣  
上のように他からの受難が常態とも云えるチェコの人々は、18世紀後半の民族復興運動の時代に活動したバラッキーの「我々が自らの精神と民族の精神を。隣人たちよりも高貴な活動へと高めなければ、我々は諸民族の間で名誉ある地位を得ることができないばかりか、ついには、自らの自然的生存さえも守ることが出来なくなるであろう」（石川達夫『プラハ歴史散策』 講談社2004）という、精神と文化の高揚こそが、小民族の生きる道であるという教えを、一人ひとりが実践しているように思える。クロメリージュは、チェコの東南部にある世界遺産の街である。この街は、17世紀の30年戦争の最後にスウェーデン軍によって2年の間占領され、またペストの流行によってほとんど破壊され尽くしていた。



スメタナ博物館前にあるスメタナ像と共に。  
前の訪問では、ここで私の作品が演奏された。

しかし、ハプスブルクの領封君主リヒテンシュタイン家からチャールズ2世が司教としてこの街にやって来ると、ただちに街は再建されて、今日の姿になったのである。そして戦後、この豪華な建物と庭園をチェコ政府が接収したために、この音楽祭などの民間の企画が、演奏会場として使用することが可能になった。このクロメリージュの現代音楽祭は、正確にはFestival Forfest Czech Republicと題され、精神の方向づけをする現代芸術国際フェスティヴァルと副題がつけられている。このForfestはラテン語のForumとFestumからの造語であり、みんなのフェスティヴァルを意味している。この音楽祭はすでに40年以上も継続されており、今日では、クロメリージュの

市のみならず、近郊の5都市を横断し、絵画やメディアアートなどの他分野の活動をも巻き込みながら、6月の1ヶ月間開催されている。音楽祭を推進するリーダーは、ヴァークラヴ・ヴァクロヴィッジ、ズザンカ・ヴァクロヴィッジの画家とヴァイオリニストの夫妻である。彼らはあの冷戦下の辛い時代から手づくりでこのフェスティヴァルを立ち上げ、現在は、地方自治体、国の機関、チェコとスロヴァキアの放送局、ユネスコ、ガウデアムス基金などの応援を取りつけて運営している。

私の作品は6月23日に演奏されたが、その日は、後半に私の作品が置かれ、前半は、主催メンバーであるヤン・グロスマンの歌曲とチェコのより若い世代の作曲家の、ヴィオラのための作品が演奏された。私たちの夕5時からの、ロシア皇帝とヴィーンの皇帝が会談したという豪華な大広間での演奏会が終わり、続いて夜8時からすぐ側の古い教会で、隣町の立派な腕の弦楽4重奏団がチェコの作曲家の作品を

4曲演奏し終わると、すでに時計は夜の10時を廻っていた。ヴァークラヴがそれからお茶に招待したいというので、疲れてはいたが仕方なくついて行くと、何とこれが彼らの自宅で、この時初めて私は、このもの静かに演奏会場の雑用をやったり、カメラマンをしていた彼こそが、まさに主催者であり、画家であることに気がついたのであつた。彼はこのフェスティヴァルについて、次のように述べている。「狭い地域での地域的な限界や商業的な利益が創造的な芸術のもつメッセージを覆い尽くそうとする現在の工業化社会において、これを守るただ1つの方法は、国際的な芸術組織である。私は、今日のグローバル社会での芸術の役割を、このフェスティヴァルを通して探求したい」。要するに彼らチェコの芸術家たちは、戦後の長い米ソ冷戦の影響のもとで、国どうしの行き来を禁じられ、芸術的交流の阻害された状況を政治の力ではなく、芸術の力で乗り越えようとしているのである。



チェコの作曲家  
ヤン・グロスマン教授とともに。



世界遺産の街クロメリージュでの演奏会。  
写真は私の作品を歌う妻啓子。

しかしもちろん彼は、ここで展示される芸術が、決して多くの大衆に呼びかけるものではなく、少数の選ばれたものにのみ呼びかけるものであることを知っている。1ヶ月に渡るフェスティヴァルのプログラムは、チェコ及びスロヴァキアの音楽家によるものが大半であるが、イスラエル、イタリー、クロアチア、スウェーデン、ドイツ、そして私たち日本からも音楽家が参加して作られており、主催者側にとっても、訪問者側にとっても、十分に興味深いものであった。また彼らの演奏水準は非常に高く、他のヨーロッパの水準に比べても決して劣らないものであったと思う。

グロスマンは、10年以上前に私の曲の伴奏者ユリア大槻のアカデミー修了演奏会での私のピアノ作品を聴いて興味を持ち、以後、彼の教

える大学で私の作品を楽曲分析の教材にしていると語った。だからあなたは、チェコでは有名なのだと。私自身、現代の日本において作曲することがどれほどの意味を持つかと、つねに自問自答してきた。

けれどもこのような事実に出会うと、もっと広い目で、音楽のあり方を考えなければいけなかったと反省させられる。グロスマンや他のチェコ作曲家たちの作風について述べると、しっかりした伝統的な技術の上に、静かな祈りや宗教的な精神性を表現しようとする傾向が聞き取れる。これはさきのバラッキーの教訓を、彼等が身に沁みて意識し、作曲しているからなのだと思う。



クロメリジーシュの演奏会場になった、17世紀に建てられた司教の館。

#### 4. ドマジュリツェの演奏会及び私たちの課題



クロメリジーシュの街角に貼られているフェスティヴァルのポスター。

ドマジュリツェはプラハの東南に位置する小さな街で、古くからビールで有名なブルゼニ（ピルゼン）を通ってドイツのレーゲンスベルクへ抜ける、街道の街として栄えた。ここでも街のたたずまいは古いままで残されており、今日では多くの観光客が訪れる街として知られている。この街では「夏の文化祭」という催しが毎年行われており、20以上もある企画の中に私たちの演奏会は、「日本の夕べJaponsky Vecer」として、6月17日に組み込まれていた。街のあちらこちらに私たちの演奏会のポスターが貼られており、会場は街のコンセルヴァトワールの1室であった。

しかしこの会場は、高い天井に立派な天井画の描かれているのは良いとしても、カーテンのない窓から日暮れの遅い夕日が差し込むのと、たった1台しかないというグランドピアノが打ち合わせが悪かったために他の部屋で使われており、アプライドで演奏しなければならなかつたことには閉口した。それでも聴衆は十分な期待を持って聞いてくれ、大きな反応を得たこ

とは、私たちにとっても喜びであった。コンセルヴァトワールを辞するとき、主催側で私たちの世話をしてくれた婦人が、「今日は素晴らしい演奏をありがとう。これは私のお返しです」といってきれいに装丁された本をくれた。宿に帰って開けてみると、これは彼女のスケッチ帳で、改めて彼女もまた、画家であったことを知つ

たのであった。また、遅い夕食に訪れたレストランの主人が、「あなたたちは日本人だろう、今日の演奏会をみんな楽しみにしていたよ」と云われたのにも、びっくりさせられた。

さて、以上の体験の上での私たちの会へのささやかな提案である。私たちの会にも多くの優れた演奏家、練達の作曲家が所属している。そして多くの演奏会を定期的に主催しているのであるが、聴衆の動員、社会へのインパクトという点では必ずしも十分とは云えない。私の日比谷高校時代の同級生で旧大蔵省高官、駐米公使などを勤めた友人がいる。彼は役員を勤めているオペラシティの切符以外はすべて切符を買って、毎晩欠かさず音楽会に通っている。彼はそれらの情報を毎晩の音楽会で配布される膨大なチラシから得るのである。



私たちの世話をしてくれたヤナ・フルシュコヴァさんが描いた、  
ドマジュリツェの街のスケッチ。

たことが、私のささやかなチェコでの体験の結果である。会員外の本誌の読者も、ぜひ、アドバイスを編集部に寄せてくださることをお願いしたいと思う。

(なかじま・つねお 本会作曲会員)



ドマジュリツェでの演奏会場になったコンセルヴォートワールの部屋とその天井画。

# 様々な音の風景 IX

## 日本音楽舞踊会議創立50周年記念

### 《ご挨拶》

本日はお忙しい中のご来場、心より御礼申し上げます。  
この演奏会は本会の主要な催しの一つとして、2004年より毎年、内外の20世紀以降の音楽作品の紹介を主として、会員演奏家、同じく作曲家の参加、共同を中心回を重ねて参りました。ところで、今回は日本音楽舞踊会議創立50周年記念となります。邦人作品を含む20世紀後半の作品と現在進行中の会員作曲家の作品が若手からヴェテラン迄を含む優れた演奏家によって演奏されます。  
この公演で一人でも多くの方々が現代の音楽に触れ、共感を持って最後迄お楽しみ頂ればと切望して止みません。

企画制作 北條直彦（公演局長）

### 【プログラム】

1. 林 光：ピアノソナタ第1番 栗栖麻衣子（Pf.）
2. エルヴィン・シュルホフ：ヴァイオリンとチェロのためのデュオ  
粟津 悅（Vn.）奥村 景（Vc.）
3. 北條直彦：「響相」記憶の風景へのプレリュード,ピアノ小品 古川五巳（Pf.）
4. 鈴木 登：「被爆地蔵によせて」～弦楽四重奏のためのレクイエム～  
恵藤久美子（Vn.）繁樹百合子（Vn.）斎藤 和久（Vla.）安田謙一郎（Vla.）  
-----（休憩）-----
5. 武満 徹：「揺れる鏡の夜明け」～ヴァイオリンデュオのための  
恵藤久美子（Vn.）田口美里（Vn.）
6. 中嶋恒雄：万葉による挽歌  
中嶋啓子（Sop.）千葉純子（Vn.）安田謙一郎（Vc.）
7. バルトーク：ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第一番  
北川靖子（Vn.）北川暁子（Pf.）

2012年10月15日（月）すみだトリフォニーホール 18:30 開演

## ⑤武満 徹：「揺れる鏡の夜明け」～ヴァイオリンデュオのための

アニとアイダ・カヴァフィアン姉妹の依嘱により書かれた作品。二人によって1983年11月、カーネギー・ホールで初演された。作曲者の楽曲ノートによると、この作品は大岡信とトマス・フィッシモンズによる同名の連詩に基づいて作曲されたとある。曲は次に示した四つの部分からなる。

- I 秋 Autumn (フィッシモンズ)
- II 過ぎて行く鳥 Passing Bird (大岡信)
- III 影の中で In the Shadow (大岡信)
- IV 揺れる鏡 Rocking Mirror (フィッシモンズ)

(文：北條 直彦)

### 【恵藤 久美子（えとう くみこ）：ヴァイオリン】（前ページ参照）



#### 【田口 美里（たぐち みさと）：ヴァイオリン】

日本クラシック音楽コンクール全国大会第一位。「コンセールマロニエ21」弦楽器部門第一位、他多数のコンクールで優勝、入賞。読売新人演奏会、サイトウキネンフェスティバル、アフィニス夏の音楽祭等に出演。

桐朋女子高等学校音楽科、桐朋学園大学、同研究科卒業。これまで、恵藤久美子、原田幸一郎、堀正文各氏に師事。ソリストとしてや、室内楽での活動も幅広く行っている他、桐朋学園子供のための音楽教室講師として後進の指導にも力を注いでいる。

現在、東京都交響楽団ヴァイオリン奏者。

## ⑥中嶋 恒雄：万葉による挽歌 (Elegy from Manryo)

この曲は、当初ソプラノ、ヴィオラ、箏のために作曲され、1986年に私的な会第3回アルプレオ音楽展で初演された。その後、改訂を重ね本会の安田謙一郎氏の協力を得て、上のような編成で再演をする事になった。曲は2つの部分からなり、前半は器楽のみで、後半はソプラノが加わって演奏される。

歌詩は、柿本朝臣麿が妻の死んだ後、泣き悲しんで作った長歌にもとづいている。

(文：中島恒雄)

中嶋恒雄：ヴァイオリン奏者。桐朋学園大学特任教授。日本音楽家連盟会員。



### 【中嶋 恒雄（なかじま つねお）：作曲】

東京芸術大学音楽学部作曲科、指揮科卒業。1984年カリフォルニア大学サンディエゴ校に研究員として在籍する。上野学園大学、東京学芸大学など多くの大学で講師を勤めるとともに、文部省大学設置審議会委員長など、日本の音楽大学行政に関わる多くの仕事をした。1990年第1回山梨県文化奨励賞受賞。現在山梨大学名誉教授。財団法人音楽文化創造参与。日本音楽舞踊会議 会員。



### 【中嶋 啓子（なかじま けいこ）：ソプラノ】

山梨大学教育学部音楽科卒業、片野坂栄子氏に師事。平成11年ミラノ音楽院に留学し、カルラ・ヴァンニーニ、マルガレータ・グリエルミ女史のもとで研鑽を重ねる。2004年にチェコ・プラハスメタナ博物館ホールにてグロスネロヴァー・ユリア大榎とジョイントリサイタルを開催した。本年6月には再びチェコに渡り、各地を演奏旅行した。特にクロムニエジーシュの現代音楽祭に日本代表として招かれ、好評を博した。

2011年よりYOUTUBE上に演奏を発表している。



### 【千葉 純子（ちば じゅんこ）：ヴァイオリン】

桐朋学園高校、大学を経てジュリアード音楽院に奨学生として留学。在学中にNYアーティストインターナショナルコンクールで優勝、カーネギーリサイタルホールでNYデビュー。これまでに、プラハ放送交響楽団、プラハ室内管弦楽団、ドイツ・バッハアリステン、ウィーン・ヴィルトゥオーザ、タイペイ交響楽団などと共に演奏。CDは、「レスピーギ：ヴァイオリン・ソナタ」「モーツアルト：ヴァイオリン協奏曲全集I」「ヴァイオリン名曲の花束」など6枚をリリース。ソロの他、紀尾井シンフォニエッタ東京、チェンバーソロイストKANAGAWAのメンバーとしても活躍。

フェリス女学院大学音楽学部講師、洗足学園音楽大学講師、山梨学院大学附属小学校特別講師。

### 【安田 謙一郎（やすだ けんいちろう）：チェロ】（前々ページ参照）

#### ⑦バルトーク ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第一番

この曲は1921年バルトーク40歳の時にヴァイオリニストのイエル・ダラーニのために書かれ作曲者自身のピアノで初演されている。この時期は彼がハンガリーの民族音楽に没頭し、一方ではドビュッシーの印象主義やシェーンベルクの新音楽と云った当時の前

# 様々な音の風景 IX

日本音楽舞踊会議  
The Conference of Music and Dance Japan  
創立50周年記念

林 光 ピアノソナタ第1番  
Hikaru HAYASHI Piano Sonata No.1

栗栖 麻衣子 (pf)  
pf Maiko KURISU

シュルホフ ヴァイオリンとチェロのためのデュオ  
Erwin Schulhoff Duo for Violin and Cello

栗津 悠 (vln) 奥村 景 (vc)  
vln Makoto AWAZU ve Kei OKUMURA

北條 直彦 「響相」記憶の風景へのプレリュード

古川 五巳 (pf)  
pf Izumi FURUKAWA

ピアノのための3つの小品

1.青き世の詩 2.小さな絵から 3.茜色に暮れて

鈴木 登 「被爆地蔵によせて」一弦楽四重奏のためのクイエム  
Norobu SUZUKI "A JIZO ATOMISEE" Requiem pour quatuor a cordes

恵藤 久美子 (vln) 繁桜 百合子 (vln)  
vln Kumiko ETOH vln Yuriko Shigematsu

齊藤 和久 (vla) 安田 謙一郎 (vc)  
vla Kazuhisa SAITO ve Kenichiro YASUDA

休憩

武満 徹 「揺れる鏡の夜明け」ヴァイオリンデュオのための  
Toru TAKEMITSU "Rocking Mirror Daybreak" for Violin Duo

恵藤 久美子 (vln) 田口 美里 (vln)  
vln Kumiko ETOH vln Misato TAGUCHI

中嶋 恒雄 万葉による挽歌  
Tsuneo NAKAJIMA Elegy for Mnnyo

中嶋 啓子 (sop)  
sop Keiko NAKAJIMA

千葉 純子 (vln) 安田 謙一郎 (vc)  
vla Junko CHIBA ve Kenichiro YASUDA

バルトーク ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第一番  
B.Bartok Sonate for Violin and Piano No.1

北川 靖子 (vln) 北川 晓子 (pf)  
vln Kiyoko KITAGAWA pf Akiko KITAGAWA

2012年10月15日(月) 18:30 開演 18:00 開場

すみだトリフォニーホール(小ホール)

全席自由席: 3,000円 / 当日 3,500円 ※未就学児の同伴はご遠慮ください



Since 1962

主催: 日本音楽舞踊会議  
(The Conference of Music and Dance Japan)

後援: 現代音楽協会・月刊「音楽の世界」

お問い合わせ: 日本音楽舞踊会議事務局

Tel/Fax: 03-3369-7496

E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

Website: <http://cmjd1962.com>

企画 公演局: 北條 直彦

Designed by Migaku KITSUKAWA

